古代ギリシャ・ローマ都市住宅における 上部空間に関する研究

STUDIES ON THE UPPER FLOOR OF TOWN HOUSES IN ANCIENT GREECE AND ROME

堀 賀 貴*
Yoshiki HORI

The upper floor of town houses had a number of important functions, such as bedrooms, store-rooms and dining rooms. This variety of functions is a characteristic shared by houses in both societies. An interesting distinction appears when method of construction is considered. Town houses in Greece were strongly affected by city planning that regulated that all rooms had to face south. On the other hand, town houses in lower and middle class housing in Pompeii show much less evidence of planning and an upper floor was often added at a later date.

Key Words: *Greece, Rome, Pompei, Olynthos, town house, upper floor*
ギリシャ、ローマ、ポンペイ、オリュントス、都市住宅、上階

はじめに

古代ギリシャ・ローマ時代の住宅において、上階は常に付属的な空間として扱われてきた¹⁾。その結果、上階は寝室、作業場、奴隷部屋、倉庫などの用途とされているものの、多くの場合、復原作業をともなう上部空間については、依然として曖昧な点が多く残されている。また、文献上にあらわれる古代ギリシャ住宅の多くに上階の存在が確認できる一方で、オスティアに代表される帝政期以降のローマ都市住宅におけるインストラと呼ばれる多層階の集合住宅が存在することも明らかである。こうした、上階をもつ都市住宅の形式が、それぞれまったく単独に発生し、展開したのか、あるいは深い関連性をもつのかも大きな問題の一つであろう。

したがって、ポンペイに残る多くの住宅遺構は、紀元1世紀以前の都市住宅を示しているという点で、非常に重要な位置を占める。紀元前1世紀の建築家であるヴィトルヴィウスは、建築書の中で、特にギリシャ人住宅に

ついて記したが、それはギリシャ住宅が当時のローマ住宅に深い影響を及ぼしたことを示すと同時に、逆に当時のローマ住宅とギリシャ住宅が本質的に異質のものであったことを示唆しているともいえる。ボエシウスは、ローマ都市住宅の成立に関して、エトルリアにおけるタブリヌムとアラエの直交性がローマにおけるアトリウム形式の起源となり、ギリシャからのペリストリウムがアトリウム式の住宅の後背部に付け足されて、ポンペイにみられる最も一般的な住宅形式であるドムス式が誕生したと結論付けた²⁾。おそらく、ローマ住宅の起源がエトルリアとギリシャ双方に遡るものであるということに異論はないであろう。しかし上階を含めてギリシャ住宅からローマ住宅にすべてが完全に移入されたわけではなく、ローマ人はギリシャ住宅から何を学び、何を切捨てたのかを明らかにする必要がある。

本論においては、上記の観点を踏まえ、ヘレニステック期から共和制後期にいたる、典型的ローマ都市住宅が

* 京都大学工学部建築学科 大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Kyoto Univ., M. Eng.

形成される時期に関して、特に上部空間の利用法に着目し、考察を加えるものである。

また、特に保存状況と調査成果が充実している遺構であるオリュントスとポンペイを中心に考察を進める³⁾。

1. ギリシャにおける上部空間

1. 文献に登場する上階

ギリシャ住宅における階上空間に関しては否定的な見解が非常に多い。一般的には女部屋であると奴隷用の部屋というような、いわば付属的なものであったという見解が多いが、その理由は二階以上を示す実際の遺構が全く現存していないこと⁴⁾にあると思われる。ロビンソンもオリュントスの住宅群について「むしろ疑わしい」と記している⁵⁾。

しかしながら、文献史料を調べてみると階上空間が必ずしも付属的な機能しかもたされていなかったとは考えられない。上階の利用例としてはリシアスにおける、友人を二階で接待した、あるいは食事をした、寝たという記述⁶⁾。アリストファネスにおいても二階にベッドがあり、妻と奴隷が同室で寝たという記述がみられる⁷⁾。一階に男性用の寝室、二階に奴隷、妻の寝室という点では、従来からの厳格な部屋の分離が強調されるが⁸⁾、部屋の隔離についても、クセノフォンは「男性用と女性用の区画の間に鍵を掛けた」と記し⁹⁾、男性用の空間と女性用の空間が隣接していたことを示唆している。これは、住宅のプランにおいて必ずしも男性用の部屋、あるいは女性用の部屋の配置が厳格に決められていたわけではなく、部屋を男性用、女性用と使い分けることが重要であったことを示している¹⁰⁾。このように、アンドロン、アンドニーティスが男性用の部屋という明確な意味があったとしても、それは男性用という部屋の機能に対する呼び名であって、必ずしも住宅のある部分あるいは特定の部屋を指し示すものではないと考えられる。また、リシアス(I, 9-10)に、エウフィレトスの家は従来二階建てで一階が男部屋、二階が女部屋であったが、子供が湯を使う度に梯を登りおりするのが危険だという理由で、男部屋と女部屋を入れ替えたという記事がある。また、別の箇所では最も経済的な住宅として一階と二階を同じ大きさにとったものが描かれている¹¹⁾。

これらの記述は、多くの部屋がその機能をお互いに入れ換えることが可能であったということを示唆しており、アンドロニーティスなどの一部の部屋を除いて、おおくの部屋が特定の様式を要求せずに、類似した形態を持っていたと考えられる。この点では、上記の文献上に登場する住宅の平面構成が、パスタス式と呼ばれる、廊下を介してすべての部屋が並列的に連結される形式であったことを想起させる。文献史料は、ほとんどアテネ

に限定されるものであるため、アテネの住宅とオリュントスなどの遺構が一致する確証は存在しないが、上階を必ずしも付属的な用途として扱っていない参考例となるだろう。

2. 上階の実際

階上空間を実際に復原する試みも存在する。グラハムは、オリュントスの住宅群の中に階上空間を有する幾つかの住宅を指摘しつつ、二階建が一般的に存在していたと結論付けているが¹²⁾、その用途については明確にしていなかった。階上空間を評価する上で、一つの判断材料となるのが、二階に至る階段の配置である。なぜなら、二階へどの部屋から登るかということを考察することによって、階上空間の性質が、ある程度推測できるからである¹³⁾。オリュントスでは、階段の第一段に使われる特徴的な石材が特定されており、階段の位置を決定することができるが、それによれば、階段には大きく分けて二つの配置法がある。第一は中庭ないしその周辺の回廊部に配置されている例(図1)¹⁴⁾である。

この場合には、露天あるいは半外部の状態の可能性が高く、天候に関係なく利用する部屋、例えば寝室や奴隷部屋としては考えにくい¹⁵⁾。また、二階部分は、おそらく、アンフォラなどの重いものの貯蔵ではなく、糞など湿気を嫌う軽量なものの貯蔵に利用されていたと考えるのが妥当であり¹⁶⁾、生産活動の場であった中庭の補助的な機能(穀物倉庫や道具庫)が与えられていたと思われる。

図1、オリュントスの住宅の中庭

第二にオリュントスには少数であるが、オイコス周辺に配置される例がある。この場合、上階が第一の例のように倉庫としてではなく、天候に関係なく利用する部屋であった可能性が高い。しかも、オエクスから上階に通じていたとすれば、二階は子供部屋か、正妻の寝室であった可能性が高い¹⁷⁾。第二の例は、プリエネにおいて一般的である(図2)¹⁸⁾。この場合には、上階に中庭に

向かった廊下はなく、部屋は直接、中庭と面することになり、一階と上階が必ずしも同じプランとはいえず、全体の部屋数も少ない。

図2、プリエネの住宅

このように、上階にさまざまな使われ方が想定でき、特に後者の場合、決して無視できない重要な機能を分担していたと考えられる。しかし、すべてのギリシャ都市で上階を持つ住宅が存在していたわけではなく、コロフォンやカソッペなどの比較的簡素な構造しか持たない住宅では上階は存在しない¹⁹⁾。これらの、都市では、石材も不整形で、壁の強度は上階を支えられるほどに達していないと思われる。また、敷地が格子状ではなく不整形であるためオリュントスやプリエネのように採光や通風に考慮しながら上階を建設することは非常に困難である。さらに、構築法的に考えてみると、多くの都市では、隣接する住宅が壁を共有しており、一体的に建設しなければ、上階の計画的利用は不可能であったと考えられ、コロフォンなどの計画性の薄い都市ではその面からも上階の利用は困難であった。

このように、ギリシャ都市においては、上階は強い計画性をもつ都市において発達し、用途別に使い分けがなされていたことが推定される。

II. ポンペイ住宅の上部空間

1. ポンペイの都市住宅

ポンペイにおいては（あるいはポンペイが初期ローマ住宅を知るうえで最も有力な遺構なのだが）最も古い様式を伝えているとされる「外科医の家」（紀元前4世紀）は、遠く北イタリアのマルツァボットの住宅と共通する部分の多いアトリウム式住宅の形式を持つ。また、

アルカイック期（紀元前5世紀頃）には、ギリシャの支配下（具体的にはクマエやネアポリス）にあり、ギリシャ神殿の建設や道路整備など、計画性の強い都市へと変貌した²⁰⁾。また、ポンペイはサムニウム時代やローマ人占領後もギリシャ文明の移入の窓口として栄え、ギリシャの直接支配から脱した後も依然として強いギリシャ文化の影響下にあったことは間違いない²¹⁾。

エピディオ・ルーフォの家（Casa di Epidio Rufo、紀元前3世紀から2世紀）は、玄関広間はアトリウムというよりもペリストリウムに近く明確にギリシャ住宅の特徴を示している。リチャードソンによれば、ペリストリウムを後背部に持つ住宅形式が確立したのは紀元前1世紀頃と推定しているが²²⁾、この時期の住宅であるノツェ・アルジェントの家（Casa delle Nozze d'Argento）、メナンドロの家（Casa del Menandro）カピテリ・フィグラティの家（Casa dei Capitelli Figurati）などは典型的なアトリウム-ペリストリウム式の住宅、いわゆるドムス式住宅の形態をとっている。これらはいずれも大規模な住宅の部類に属するものである。従来のアトリウム型住宅形式に新しくギリシャ的な特徴を付け足したドムス型住宅は、単純に考えれば従来の形式に比べて二倍の面積を必要とする。紀元前1世紀以降ポンペイの人口は急激に増加したと考えられるから²³⁾、一部の裕福な一族を除いて、住宅建設について面積的な制約が加わったであろうことは容易に推測できる。

リングは、壁体構法の編年から、インスラの形成過程を上記のメナンドロスの家を含むインスラ全体について明らかにしている²⁴⁾。これによると、やはり紀元前1世紀以降、ドムス式の住宅を建てるだけの空き地は残されていないといってよく、ドムス式住宅は他人の土地を買収することのできる一部の裕福な一族に限定されていたと考えられる。

さらにポンペイ全体で考えてみると、上記の古い形式を持つ住宅がフォルムに近いいわゆる旧市街地区には少なく、やや周辺の地区に点在していることも非常に興味深い。旧市街と呼ばれる地区では建築が密集し、完全なドムス式住宅は数軒だけで、アトリウムとペリストリウムを持つもののペリストリウムを囲む柱廊が二方向だけであったり、ペリストリウムではなくビリダリウムであったりするのが実情であり、ほとんどの住宅はアトリウム式の住宅である。例えば後に詳述するレジオ7、インスラ12（以下 VII, 12 と記す）では、全体で21棟の建築物があるが住宅専用のものはおそらく4軒で、ドムス式住宅は一軒もなく、唯一3の家のみが面積的にドムス式住宅の可能性を持つ。さらに4軒の内、3の家以外は二階部分が確認されており、面積的に余裕のない住宅においては、二階部分が住宅の一部として重要な役割を果たしていた可能性がある。また、北側の店舗の後背部

にはアルコーヴ（壁が床から腰ぐらいの位置までくびれたように凹になっている部分でベッドと考えられる）を持つ部屋があり、住宅専用の建築物でなくとも、宿泊施設を持つ事例もある。

このように、ポンペイにおいて、上階が確認される多くの住宅はドムス形式を持たない中小規模の住宅である。したがって、上階を考察するにあたっては、従来あまり注目されなかった中小規模住宅が中心とならざるを得ない²⁵⁾。

2. 二階の有効な利用

ワローは、ローマ住宅について以下のように記した。

「中庭 (cavum aedium) を囲んで、(家は) それぞれの目的に合わせて、壁で分けられる。(中略) 上階で食事をとるときには、家の上階の部屋は cenacula と呼ばれ、」 (De Lingua Latina, V, 162, ed. R.G.Kent (Loeb)、筆者訳)

彼の記述から以下の二点が読み取れる。第一は季節によっては二階が食堂や居室などに使われていたと解釈できるが、この記述の対象は二箇所に食堂を持つと思われるかなり大規模な邸宅であること。第二は冬に上階を利用したことで、上階は一般的に冬に暖かく、夏には暑いと考えられ、ポンペイのような温暖な地方で恒常的に上階を利用したかどうかは疑問が残る。しかし、二階を居室として利用する習慣が存在したことは事実であり、必ずしも、食堂以外の居室が上階に存在した可能性までが否定されるわけではない。

そこで、以下において実際に実測調査を行う機会を得たポンペイのVII, 12の住宅群について上階の利用状況に関して考察を加える。

1) VII, 12

VII, 12の住宅群(図3)に関して、注目すべきことは、店舗あるいは生産施設を併設した住宅が非常に多いことである²⁶⁾。例えば、22の家は明らかに生産施設が中

心の家で、トリクリニウムやビリダリウムなどを持つものの、その他の平面構成を考慮してみても、おそらくこの家の持ち主は郊外か別の場所に家を持ち、この家に宿泊することはなかったと考えるほうが妥当であろう。同様に、北側の区画には規格化された店舗付き住宅が並ぶが、住居としては非常に小規模のものであり、店舗が中心の平面構成と言わざるを得ない。22の家の場合と同様、持ち主は別の場所に住んでいて、ここに寝泊まりするのは、別の管理者の可能性もあるだろう。ここでは、住居を中心に検討しているので、詳述は避けるが、これらの住宅群でも、二階部分が重要な役割を果たしていた可能性がある。北側の店舗付き住宅群についてはほとんどの家に上階への階段の痕跡が確認されているし、17, 22の家にも生産施設と一体化する様な形式で二階が付設されている場合が多い。

次に、主に居住用として使われていた4軒の内、上階が確認される3軒について詳述する²⁷⁾。

a. コルネリウス・ディアドメヌスの家

(Casa di Cornelius Diadumenus、下図)

図4、コルネリウス・ディアドメヌスの家

図3、VII, 12の住宅群

フィオレリはd, e室がクビクルム、hがトリクリニウム、iがアトリウム、kがタブリヌム、mがオエカスでn, gに関しては用途を記していない。彼は主に出土品や壁面装飾を基準に用途を決定しているから、おそらくn, gについては手掛かりがなかったものと思われる。しかも彼の記述では、奴隷用、主人用とも寝室が確定されていない。iに関してはアトリウムと解しているが、完全ではない。おそらく作業用のスペースであろうと思われる²⁸⁾。1室は開口高さが低く(約1m20cm)で、建具もないことから、物置のような付属的な部屋であったと考えられる。m, n室は天井がヴォールト状になっていたと思われ、建具も簡便なものが使用されていることから寝室とは考えにくい。またg室は、もとはi室に開口を持っていたが、c室に変更され、両開きの扉が付いていることから寝室とは考えられず、倉庫か物置と考えられる。

ここでは二階部分がe, g, n室の上部に存在していたことが推定される(図4)。プランはほぼ一階と同じと考えてよいがおそらく、一階に寝室として適当な部屋が見あたらないため寝室の可能性が高い。この二階は、明らかに増築されたものであり、もとはg室が寝室であったと推定される²⁹⁾。

b. バルコーネ・ペンシーレの家 (Casa del Balcone Pensile、下図)

図5、バルコーネ・ペンシーレの家

フィオレリの解釈では、bは共同寝室(おそらく奴隷のためのもの)、d, iはクビクルム、eがトリクリニウム、hがタブリヌム、kはエクセドラ、mは倉庫、nは貯蔵庫、oは台所となっている。おそらく、l室は作業場と考えてよい。他の部屋の用途は不明で、a, b, c, dの部屋の上部の二階の用途についてもはっきりしない。このようなバルコニーのある家は、アボンダンツァ通りにおいて多く発掘されているし、壁画のなかにも多く見られる³⁰⁾。上記のフィオレリの解釈では、やはり主人の寝室が確定されない。一階にあるのは奴隷用の寝室(薄暗く装飾もないので彼は奴隷用と考えたのだろう)のみで、可能性が残されているのは上階である。上階が確認されるのは

前面のバルコニーのある部屋と後背部のm, n, o室の上部である。前面のバルコニーの部屋においては、装飾性は豊かであるけれども、玄関らの部屋までに扉が一枚も存在しないなど、アプローチの点から私的な用途は想定しにくく、商談などの接客スペースと考えるのが妥当である。したがって、主人の寝室である可能性が最も高いのは、後背部のm, n, o室の上部と推定される。この部分は、ブロックやレンガ積みが使用されており、比較的新しい時期に上階も含めて、一体的に建設されたと考えられる。一階の倉庫、貯蔵庫の天井高が非常に高く(約4m)、二階の天井までの高は7m以上になると考えられ、家全体の建設当時から計画されたとは考えにくく、この二階をもつ部分のみが増築されたと思われる。

c. 21の家(下図)

図6、21の家

フィオレリは、b室(アトリウム)やf室(食堂)などの特徴的な部屋以外はすべてクビクルムと呼んでいる。21室の東側に並ぶ部屋はおそらく、装飾の豪華さから見て所有者の寝室である可能性が高い。この家は背後で17の家と連結されており、17の家が生産設備(毛皮)21の家が居住空間と思われる。二階にいたる階段の存在がp室において確認でき、この部屋は明らかに屋根のない外部である³¹⁾。この住宅で特筆すべきことは、住宅部分の一階がアトリウム方向に開口を持つのにに対し、二階部分では17室側が開口となっている点である。二階部分はわざわざp室の部分から回り込んでアプローチすることになる。出土物から判断して、二階部分も主要室として使用されていた可能性があり³²⁾、こうした事実は、これら一階の部屋と二階の部屋の性格の違いを示している。二階への階段が住居である21の家と工房である17の家の連結部にあることを考慮すれば、上階は居住用というよりも、隣りの住宅から工房を管理するための部屋の存在が推定される。17の家の上階に注目するとa, d室全体に二階の床が架かっていたという復原もあるが、構造的に見てa, d室全体に床を架けることは不可能と考えてよい³³⁾。またb室(倉庫)の上部はバルコニーを持ち、非常に快適な部屋であったと思われる。したがって、二

階の部屋が工房を見下ろすことのできる位置にあり、しかも工房からも隣の住宅からも、比較的容易に昇れる位置にあったことは、これらの部屋が商取引や接待などのある程度公的な役割を果たしていた可能性も十分に考えられる。おそらく、管理的な立場の奴隷の寝室あるいは倉庫（d, e, c室の上部）とオフィスのような役割の部屋（b室の上部、およびバルコニー）が並んでいたと想定される。いずれにせよ、一階と上階で同じプランをもちながら、開口方向がまったく逆であるという構造は、一体的に建設されたとは考えにくく、やはり、平屋の住宅が、工房の併設に伴って、二階を増築したと考えるべきであろう。これらの住宅を考察してみると、ポンペイのこの区画の住宅においては、上階が寝室に利用されている例が多く、26, 28の家では主人の寝室である可能性が高い。また、それらは”増築”されたという性質が強く、さらに上階を持つ住宅の多くは居住用の要請ではなく、生産上のあるいは商業上の要請に基づいて建設（増築）されたと考えられる。特に、26の家では寝室が別の用途に転用され、二階に移動している。ポンペイの住宅では食堂やタブリヌムなどの部屋はいずれも特徴的な形態を備えており、他の用途への転用は困難であったと考えられる。逆に寝室や物置など、クビクルムと呼ばれる部屋が転用される機会が多かったとも考えられるだろう。

III. ギリシャにおける規格性とポンペイにおける特殊性

上階の利用法については上記の考察より、単純に上階の用途だけを列挙してみると、奴隷の寝室、主人や妻の寝室、倉庫などギリシャとローマではほとんど同じ用途に用いられていると考えてよいけれども、その住宅平面内で示す意味はまったく異なるといえる。以下でその点について考察する。

1) 発生過程での決定的な違い

オリュントスやプリエネなどのギリシャ住宅は発生的にみて、明らかに計画された住宅であり、建設当初から上階の利用が想定されていたと考えてよい。

一方、ポンペイの住宅では街区は方形に近い状態であるけれども、実際の住宅プランはいくつもの様式を経て自然発生的に登場してきたものである。構法も必ずしも一定せず、新しい構法が産まれても、以前の構法が消滅するわけではなく、継続して共存した。したがって、当初から上階の利用が計画されていた住宅は少なく、増築という形をとった。

2) 二階の使用法

ギリシャ住宅における計画的な性格は、オリュントスなどの計画性の強い都市に限られ、文献史料とともに考察してみると、アテネなどでは、他の計画都市で示されたような上階の利用は必ずしも行われていなかった。男

性用の寝室が必ず一階にあったことは、ギリシャ住宅とポンペイ住宅の決定的な違いであるが、ポンペイにおいては一階、二階を問わず主たる寝室の位置は確定されない。

逆にいえば、部屋の用途を比較的に柔軟に変更できたということは、各部屋が類似した形と中庭に面して集中的に配置されているという平面構成を持ち合わせていたからであり、住宅平面における全体計画と規格の存在が考えられる。

一方、ポンペイにおいては、二階の増築に対処療法的かつ自然発生的な性格が反映されており、ギリシャの植民都市のように画一的、計画的な上階の建設は行われなかったといってもよいだろう。さらに、食堂やタブリヌムなど特殊な形をもつ部屋が多いことから、部屋の用途変更を柔軟に行うことは難しく、各部屋の用途はかなり固定的であったと考えられる。

3) 厳格な方向意識の存在

クセノフォンはギリシャ住宅について、以下のように記している。

「家屋について、おなじ家が美しい家でありまた有用な家であると語ることによって、家はどんな風に建てるべきであるかを教えたように私には思える。（中略）南向きの側を高く建てて冬の陽がさえぎられないようにし、北向きの側を低くして寒い風があたらないように建てる必要があるだろう。」（クセノフォン、「ソークラテースの思い出」、第三章、8節、佐々木 理訳、岩波書店）

このように、ギリシャ住宅には明確な方向性があった。オリュントスの住宅のように、当初から南側を低く北側を高くした住宅では、クセノフォンの教えに従う限り、もはや二階の増築の余地はなかった。

この方向性は、ヴィトルヴィウスのシンメトリーの考え方に通ずるものがあるが、彼の時代の住宅を実際に眺めてみると、一部の豪華な住宅を除いて、シンメトリーは実現されていない。一方でオリュントスに見られるように、ギリシャのいくつかの植民都市では、その方向性が各住宅に確実に反映されている。特に、上階の建設は採光や通風の点においても重要な問題であり、彼らは住宅に画一的な平面を与えることによって、ほとんどすべての住宅でその問題は解決されているといってもよい。しかし、明確な方向性を持たなかったポンペイの住宅では、場当たり的に上階が増築され、中小の住宅にはすでに共通性はあまり見られなくなっている。その結果、採光や通風の条件は必ずしも解決されていないといえる。

結論

このように、上階の機能を考察してみると、結果とし

てギリシャにおいてもポンペイにおいても、上階に奴隷室や倉庫、婦人の寝室など、従来の住宅史では注目されなかった従属的な部屋が配置されている。両者で決定的に異なる点は、ギリシャにおいて男性用の寝室が一階に固定されていたのに対し、ポンペイの住宅においては、主人の寝室でさえも上階に置かれている例が見られることだろう。しかし、ギリシャ住宅においては、計画性と方向性が優先され、いわゆる定型と呼ばれる住宅が存在し、上階も同時に計画的に建設されていたと思われる一方、ポンペイにおける住宅は、上階は決して計画的に建設されたものではなく、派生的に増築されたものであり、その結果として、アトリウムやペリストリウムの周りを各部屋が取り囲むという住宅形式すら守られていない例が多数見られる。

ポンペイの都市住宅に関して、ペリストリウムなどのギリシャ都市住宅の強い影響を容易に見いだすことができる反面、計画的都市を基盤に持つギリシャ住宅の上部空間を含めた計画的な平面構成原理を見いだすことはできない。ポンペイの住宅においては、一部の大規模な住宅を除いては、ギリシャ住宅にみられる規範としての住宅形式は存在せず、各住宅において個別に対応し、変化していったと考えられる。

謝辞

本論は、(財)古代学協会の第二、三次ポンペイ調査に参加して得られた資料に拠るところが大きい。現地において同協会の方々のご指導、ご助言を頂いたことを記して、謝意にかたい。

註

- 1) ギリシャ住宅の研究に関しては、Lawrence, A. W.: Greek Architecture, pp. 238-249, 1973 ギリシャとローマ住宅の関連については、Graham, J. W.: Origins and interrelations of the Greek house and the Roman house, Phoenix Vol.20, pp.3-31, 1966 ローマ住宅平面の研究は、Wallace-Hadwill, A.: The Social Structure of the Roman House, Papers of the British School at Rome, pp.43-97, 1988, Jung, F.: Gebaute Bilder, Antike Kunst 27, 1984 および、Drerup, H.: Bildraum und Realraum in der Römischen Architektur, Römische Mitteilungen 66, pp.147-174, 1959 など
- 2) Boëthius, A.: Golden House of Nero, pp. 18-25, 1960
- 3) これらの住宅平面が、それぞれ当時の一般的な住宅平面を十分に反映していたことを前提条件として考察を進める。
- 4) Laurence, A. W.: op.cit., pp. 247 あるいは、Martin, R.: L'Urbanisme dans la Grèce Antique, pp. 221-252, 1956
- 5) Robinson, D.M.: Excavations at Olynthus XII, p. 204, 1946
- 6) Lysias : I. 22, ed. Gernet and Bizos (Bud)
- 7) Aristophanes, Thesm. 477-89, ed. Coulon (Bud)
- 8) エヴァ・C・クルーズ著、中務哲郎、久保田忠利、下田立行訳：ファロスの王国、岩波書店、pp. 242-248, 1989
- 9) Xenophon: Oeconomicus, 9.3, ed. O.C.T. (E.C. Marchant)
- 10) Jameson, M.: Private Space and the Greek City, The Greek City, pp. 171-198, 1990
- 11) Lysias: 1.9-10 および On the Murder of Eratosthenes, 9, ed. Gernet and Bizos (Bud)
- 12) Graham, J. W.: Olynthiaka, Hesperia, XXII, pp. 196-207, 1953
- 13) オリュントスについては、ロビンソンの復原を参照し、それ以外の都市についてホフナーの復原を利用する。Hoepfner, W., Schwandner, E. L.: Haus und Stadt im

Klassischen Griechenland, 1986

- 14) Robinson, D. M.: Excavations at Olynthus VIII The Hellenic House, p. 217, 1938
- 15) 中庭は生産施設であったと考えられる。Walker, S.: Women and Housing in Classical Greece: The Archaeological Evidence, Images of Women in Antiquity, pp. 81-91, 1983
- 16) ヨーロッパや日本の民家の区別無く、作業空間に付随する上部空間は軽量物の倉庫となっている。Soeder, H.: Urformen der abendländischen Baukunst in Italien und dem Alpenraum, 1964
- 17) オエクスはいわばその住宅の主室(居間)であり、奴隷が常時自由に出入りする性質の部屋ではない。
- 18) プリエネはローマ時代まで存続した都市であるから、上階については多くの資料はないが、敷地そのものが、急峻な北上がりの地形をもち、二階の存在は、遺構的な証拠がなくとも予想できる。さらに、住宅のアゴラの通ずる幹線道路に面し、紀元前4世紀にまで遡れるいくつかの住宅では、階段が存在し、上階の存在が確認されている。ホフナーはプリエネにおける最も一般的な住宅の形式を提示したが、階段の設置場所としてオイクスを設定している。彼は一種の消去法によって階段の位置を特定した。すなわち、中庭や周辺の回廊に階段が無い以上(中庭やその周辺に階段が存在する場合は、水分による腐食を避けるため、必ず階段石が存在するから)、階段は別の場所にあるという推定である。さらに、敷地が南北に細長いことをその根拠としている。いわゆるプロスタス式の住宅で、中庭に向けて回廊は設置されないため、中庭から上階に登ることは難しいからである。
- 19) Holland, L. B.: Colophon, Hesperia XIII No.2, pp. 91-171, 1944 および、Hoepfner, W., Schwander E. L., op.cit., pp. 75-140
- 20) De Vos, A., De Vos, M.: Pompei Ercolano Stabia, pp. 8-9, 1988
- 21) Ibid.
- 22) Richardson, L.: Pompei An Architectural History, pp. 324-29, 1988
- 23) De Vos A., De Vos M.: op.cit., pp. 10, 1988
- 24) Ling, R.: The Insula of The Menander at Pompeii: Interim Report, Antiquaries Journal 63, pp. 34-57, 1953
- 25) 堀 賀貴：ポンペイにおける中・小規模住宅について、日本建築学界近畿支部研究報告集, pp. 1029-32, 平成4年度
- 26) Eschebach, H.: Pompeii, Leipzig, 1978
- 27) 以下で用いる部屋記号と用途の解釈は、Fiorelli, G.: Gli Scavi di Pompei dal 1861 a 1872, Napoli, 1873 による。
- 28) 調査時に糸を紡ぐための素焼きの重りが確認されている。
- 29) 23の家のk室の明り採り用の窓がd室に付いていたものをc室に変更した痕があり、d.e室は野外であったものを室内化しさらに、同時期あるいは別の時期に二階化したものと考えられる。さらに、室は壁面の下層に豪華な装飾が見られることから、もとは主人の寝室であったと考えられ、最終的には寝室は二階に移動したと推定される。詳しくは、Hori, Y.: The UPPER FLOOR IN REGIO VII INSULA 12 The Importance of The Upper Floor in the Study of Town Houses in Pompeii, Opuscula Pompeiana III, forthcoming.
- 30) Spinazzola, V.: Pompei alla luce degli Scavi Nuovi di Via dell'Abbondanza, pp. 257-593, 1953
- 31) 梁穴が確認できないことと、東南の隅に雨水の排水口が存在する。詳しくは、Hori, Y.: Thresholds in Pompeii, Opuscula Pompeiana II, pp. 73-91, 1992
- 32) Dwyer E. J.: Pompeian Domestic Sculpture, pp. 53-56, 1982 によると17の家には、二階から落下したと思われる石像が発見されている。
- 33) Nishida, Y., Hori, Y.: The Investigations of Regio VII Insula 12, Opuscula Pompeiana II, pp. 48-56, 1992

図版

- 図1、Robinson, D. M.: Excavations at Olynthus VIII, Plate 73 より。
- 図2、Hoepfner W., Schwandner, E. L.: Haus und Stadt im Klassischen Griechenland, Abb. 172 より。
- 図3～6、実測データに基づいて、筆者が作図したもの。

(1993年6月10日原稿受理, 1993年12月10日採用決定)